

【香川大学教職大学院の2つの特色】 ※共通科目として全員が学びます。

☆ 生徒指導と道德教育に関する指導力育成

☆ 特別な教育的支援を必要とする通常学級在籍児童生徒に対する指導力育成



【3つのコース】

- ・学校力開発コース：学級・学年団や学校経営等、組織の中核的役割を担う教員の養成
- ・授業力開発コース：道德教育や授業力向上等の学校課題解決に向けた中核教員の養成
- ・特別支援教育コーディネーターコース：特別支援教育に関わる校内体制構築の要となる教員養成（2020年度より特別支援力開発コースとなり、学部卒学生も入学可能）

【短期履修学生制度（1年間で修了）】

教職経験5年以上で県教育委員会からの推薦があり、審査によって認められた方は、所定のプログラムを実践することで、1年間の履修で修了することができます。経済的負担の軽減、学校現場を離れる期間の短縮など、先生方が学びやすい環境を整えています。修了後も、大学教員が学校を訪問し、学校課題の解決のために「学び続ける教員」の実践や校内研修等をサポートします。その取組の一部をポスターの形で発表します。

【研究の特色】 修了生のフォローアップ・プログラムによる取組のポスター発表概要

#### 1 研究主題

中学校の英語教育におけるオリエンテーション授業実施の成果と課題  
—小学校の英語教育との円滑な接続を目指して—

三豊市立仁尾中学校 教諭 赤井 真三子

#### 2 研究の具体と今後の課題

昨年度、小学校英語と中学校英語を円滑に接続させるために、中学校入学直後の英語の授業において実施する、オリエンテーション授業を開発した。本年度は、三豊市、観音寺市の中学校の14名の先生方にご協力いただき、10校732名の1年生に対してオリエンテーション授業を実践することができ、実践していただいた先生方からは、「オリエンテーション授業は効果的である」との評価を得ることができた。他方、オリエンテーション授業の実践を通して、以下のような課題も明らかになった。第1に、本年度だけの実践ではなく、継続して実践を積み重ねることで更に効果的なオリエンテーション授業に高めていく余地が残されていること、第2に、オリエンテーション授業を支えている2冊のテキストをさらに汎用性のあるものに改訂していく必要があることである。

#### 1 研究主題

小学校外国語科における評価 ～指導と評価の一体化に向けて～

観音寺市立大野原中学校 教諭 伊瀬 吏沙

#### 2 研究の具体と今後の課題

平成29年の学習指導要領改訂により、観点別学習状況の評価の観点が「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理された。令和2年度から、教科化された小学校外国語科が全面実施となる。本研究は、その評価の在り方について検討したものである。現在、小学校での主な評価方法は児童の行動観察や記述分析、作品分析となっている。評価の妥当性・信頼性を高めるために、本研究では評価規準やチェックシート、ルーブリック、自己評価カード等を作成した。各項目には、児童の様子を具体的に記述することにした。これらを活用すれば学習状況の見取りができるかと考える。しかしながら、現時点では、実際の授業において本評価を活用した検討には至っていない。本評価方法を使って小学校教員の誰もが適切な評価をすることができるかどうか、今後検証が必要である。

## 1 研究主題

### 習得と探究のバランスがとれた「教えて考えさせる授業」の構築 ～算数科の授業を通して～

綾川町立滝宮小学校 教諭 大林 紀章

## 2 研究の具体と今後の課題

本年度、「教えて考えさせる授業」を取り入れて算数科の授業を行った。「チャレンジ問題」に意欲的に取り組む姿が見られる一方、授業の進路が遅れ気味になった。それは時間を費やして「算数の学習」（県版ワーク）に取り組んだからだ。更に授業から時間が経ち「算数の学習」を行うため、定着が良くない箇所が見られた。付箋だらけの「算数の学習」を見て、モチベーションを失う児童もいた。そこで「チャレンジ問題」をする時間を「算数の学習」の時間へとシフトした。「算数の学習」に取り組むことは、従来の「チャレンジ問題」に取り組むことよりも、その学習効果が低い可能性がある。しかし、現有している教材を活用して、「チャレンジ問題」のように思考力や意欲を育て、最大限の成果を出す学習指導を探っていくことが、児童と教師にとって重要なことであり、今後の課題だと考える。

## 1 研究主題

### 生徒の特性に合わせ、分かる楽しさを感じさせる英語指導の試み

高松市立山田中学校 教諭 大森 陽子

## 2 研究の具体と今後の課題

本研究では、特別な支援を要する生徒に、個々の特性に合わせた英語の授業を行い、成果と課題を検討することを目的とした。中山・森田・前川（1997）の見本合わせ法を参考にして、文字（文章）と意味、音をマッチングさせた授業を行った。例えば、アルファベットと単語を学習する際には、フォニックスの1文字1音ルールの指導を実践した。あるいは、デジタル教科書を用いて、音（英文）と意味、挿絵をマッチングさせることで生徒の学習を促した。その結果、英語が分かるという経験ができて、授業に取り組む生徒の意欲が向上した。また、新たに学習した事柄（単語や文章等）の定着を促すことができた。今後の課題としては、絵になりづらい単語や複雑な英文法の理解と定着を促す指導方法の工夫と、動機づけをさらに高めるための方法を検討することである。

## 1 研究主題

### 自立活動の内容を教科学習に生かす取り組み ～国語科の物語教材で表情マークを活用した読みの実践～

岡山県赤磐市立山陽小学校 教諭 表 紀子

## 2 研究の具体と今後の課題

発達障害のある児童には、感情理解の困難さや感情を言語化して伝える困難さがみられることが多い。そこで、自立活動の授業で感情理解やその感情を表す言葉と表情マークををつなげて整理する学習を行った。その後、特別支援学級での国語の物語教材の学習時に、自立活動で学習した感情を表す言葉と表情マークを活用しながら、登場人物の心情を考える活動を行った。その結果、日頃は心情の読み取りに消極的な児童が、表情マークを取り入れたことで積極的に活動に取り組み、登場人物の心情について発言する姿が見られた。今後の課題として、自立活動で学習した感情を表現する言葉を日常生活においても活用できるようにすることや、学年が上がるにしたがって複雑化していく物語教材の読み取りでも活用できるような方法について検討していきたい。

<p>1 研究主題</p> <p>知識構成型ジグソー法を用いた効率的・効果的な授業研究システムの開発 ～目的意識の共有化と主体性の向上を目指して～</p>
<p>さぬき市立さぬき南小学校 教諭 原 慎太郎</p>
<p>2 研究の具体と今後の課題</p> <p>校内研修における授業研究を効率的・効果的に実施し授業改善に資することは喫緊の課題である。研究授業の事後討議会の実態を踏まえ、①拡散的な議論を討議の視点に集約する、②課題意識を持って参加させる、③時間厳守を目的に実践研究を行った。</p> <p>そこで、知識構成型ジグソー法を用いた事後討議会を6回実施し効果検証を行った。具体的には、2回のグループ協議による本校討議の「4視点」への意識づけ、「討議のワークシート」やプレゼンを活用した「4視点」の視覚化、環境整備による時間短縮等である。これらの研究実践を通じて、①教員一人一人の参加意欲が高まった、②討議の「4視点」を意識した討議が行われるようになった、③時間が厳守されたなどの成果を得ることができた。一方で、討議の成果を実感できる工夫が必要なことが考えられた。</p>

<p>1 研究主題</p> <p>ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善 ーすべての子どもの学力向上をめざした学習支援の在り方ー</p>
<p>高松市立川島小学校 教諭 廣瀬 美由紀</p>
<p>2 研究の具体と今後の課題</p> <p>昨年度、ユニバーサルデザイン(UDと略記)の視点を取り入れた道徳科の授業について研究し、困り感のある児童の内容理解等では成果が得られた。一方で、活動の切り替わりでの支援の重要性が明らかになり、見通しの持たせ方や周りの子のかかわりの支援について課題が残った。今年度は、児童の特性を基につまずきを予想し、国語科による授業で、抽出児の参加率を求めためインターバル記録を行い、教師行動や支援との関係について考察した。また、現職教育主任として学校全体でUDの視点を取り入れた授業改善について提案し、授業のUD「川島スタイル」を構想して校内研修や研究授業を実施した。今回は抽出児を1名で行ったが、児童の困難さは多様で、アセスメント、つまずきの予想を生かした授業づくり、更に学習環境や人的環境の充実等で課題が残る。</p>

<p>1 研究主題</p> <p>学級活動の充実を基盤とした算数の教科学習について ー非認知能力と資質・能力を育む教育実践の試みー</p>
<p>高松市立古高松南小学校 教諭 藤本 彩織</p>
<p>2 研究の具体と今後の課題</p> <p>昨年度は、算数科での資質・能力の育成を、数学的活動を通して実現するための授業デザインについて考察し、実践的に試行・省察した。今年度は、資質・能力の育成には、土台として非認知能力の醸成が必要であると考え、「非認知能力醸成のための学級づくり」と「資質・能力を育むための授業づくり」の両方を実践した。「非認知能力醸成のための学級づくり」では言葉を大切にすることで、<u>プラスに物事を捉える学級文化の構築</u>を図った。「資質・能力を育むための授業づくり」では、<u>子どもが主体的・対話的に学ぶ学習活動を組織</u>した。それにより多くの子どもが、自己やクラス集団のよいところを捉えるフレームを獲得し、成長マインドセットがクラスに広がった。今後は互いの気づきを子どもたち同士でつなぎ、学びを深める学習活動や教師の支援を考えていきたい。</p>

1 研究主題	子ども同士の対話を通して「分かった」を実感できる授業づくり ～6年 算数 「円の面積」サツマイモの形の面積を求めよう～
三木町立平井小学校 教諭 柳原 由美子	
2 研究の具体と今後の課題	対話を通して児童が「分かった」を実感できる授業づくりのための工夫について研究を行った。工夫の一つ目は、自力解決に向けて具体操作ができる教具の準備である。二つ目は、分かることと分からないことを書き出し明確にした上でグループ交流（対話）に入ることである。このような学習環境を整えることで、お互いが問題解決に向けての個の気づきや、分からない箇所を共有でき、互いの思考を具体的に整理・発展させて考え、自らの思考をより深化させることができた。また、対話中は児童が自分たちで解決していくことに没頭できるように、教師の関与を最小限とした。今後は、児童の思考や独創的な発想に対するタイムリーな評価を向けられるように児童を注意深く観察することで、グループで発見した気づきを全体で効果的に共有していく方法について、更に深めていきたい。

1 研究主題	数学的問題解決力を高める授業実践 - PPDAC サイクルを用いて-
丸亀市立南中学校 教諭 吉田 真人	
2 研究の具体と今後の課題	全国学力学習状況調査において、香川県教育センターの分析によると、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」という質問に対して肯定的に答えた生徒は、全国では74.8%であるが、香川県では71.7%である。また、問題解決を問う設問では、正答率も全国と比べて低いという結果が見られる。そこで、これを改善するためには、問題解決の過程の充実を図ることが重要ではないかと考えた。筆者は育てたい力を「数学的問題解決力」と定義し、前年度はPPDACサイクルを用いた統計領域での研究を行った。今年度は、領域を図形領域に拡張し、体育館の高さを求める問題を通して、数学的問題解決力の育成を図った。その後実施した、全国学力学習状況調査を用いた問題解決力を問うテストでは、正答率が18.8%改善するという結果になった。

1 研究主題	I C T機器を有効に活用する視覚障害教育について
香川県立盲学校 教諭 吉田 由美子	
2 研究の具体と今後の課題	視覚障害のある児童生徒が自分に合った方法で学習を進めたり、自立する力を身につけたりするために、どんなI C T機器やアプリが有効であるかについて、研究を進めた。学習活動や行事、学校生活等の場面において、児童生徒にタブレットやパソコン等を使用する機会を多く持たせる（デジタル教科書の活用、実験での活用等）ことで、それぞれが自分の見え方に合わせた有効な学び方を選択できるようになってきた。全校での情報共有を行い、さらに活用を進めたい。また本校での実践は、通常学級に在籍する視覚障害のある児童生徒や、視覚認知に弱さのある児童生徒にとっても有効であると考えられるが、通常の学校では個に合わせたI C T機器の活用が進んでいない。校内での連携および通常の学校に在籍する視覚に困難さのある児童生徒にI C T機器の活用を広げるシステム作りが、今後の課題である。

